

CAN-DOリストに基づいた英語授業実践に関する高校生の意識調査

—拠点校2年目の指導改善の取組—

岡崎 浩幸

CAN-DOリストに基づいた英語授業実践に関する高校生の意識調査 —拠点校2年目の指導改善の取組—

岡崎 浩幸

High School Students' Perceptions of English Teaching Practices Based on Can-Do Statements - Hub Schools' Second-Year Efforts to Improve Instruction -

Hiroyuki OKAZAKI

摘要

V県拠点校(4高校)では、CAN-DOリストの形での学習到達目標を設定し、それに基づく授業改善を2年間実践してきた。本研究の目的は生徒の意識調査(1学年, 2学年)を通して、2年間の取組の成果や課題を報告検討することである。アンケートの結果から、「授業への満足度」「英語による授業への慣れや理解度」「英語使用への有能感」「英語学習への意欲向上」においては4校とも概ね良好な成果を示している。ただし、「CDSによる意欲向上」は低い結果を示していることから、授業は改善しつつあるがCDSの目標が徹底されていない可能性もある。また、CDSを用いて自律的学習者を育成することについては4校とも十分な成果が得られなかった。これは、生徒がCDSを参考にして自分の目標を設定し自己の学習状況を振り返るという自律に欠かせない行動が十分に促されていないからであろう。CDSによる授業実践による自律的学習者の育成について、今後更なる研究が必要となるであろう。

キーワード : 拠点校, CAN-DOリスト (CDS), 英語授業, 高校生の意識

Keywords : Hub High Schools, Can-Do Statements, English Classes, High School Students' Perceptions

1. はじめに

文部科学省は2012年度、「外国語能力の向上に関する検討会」¹⁾の提言「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(文部科学省, 2011)を受けて、英語の使用機会の大幅な拡充や英語学習に対するモチベーションの一層の向上を図る等の優れた取組を支援する事業「英語力を強化する指導改善の取組」を決定し、各県教育委員会に事業に取り組む拠点校の設置を依頼した。文部科学省は拠点校の取組には次の3点の内容を含むことを求めた。

1. 学習到達目標を「CAN-DOリスト」²⁾の形で設定・公表し、その達成状況を把握し、指導に生かすこと。
2. 授業における指導と学習評価の改善等の推進にあたり、外部有識者からの指導も受けながら授業公開や研究協議会を計画的に実施すること。
3. 授業内外において生徒が英語を使う機会を増やすことに資するようALTやインターネット等のICT等の効果的な活用を図ること。

本事業は2013年度、事業名を「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」に変更し、継続・推進された。事業の趣旨と拠点校が取り組むべき内容は1年目とほぼ同じである。また

本事業は「当該校における成果を同都道府県の全域で共有し、地域全体で戦略的に英語教育の改善を図るための取組を行う」となっている。事業の成果を今後活用していくためには、学習者である生徒にとってどのような面で役に立っているのかを明らかにしておく必要がある。本稿では、V県拠点校4校における2年間の取組の成果や課題を生徒の意識調査を通して検討する。

2. 研究の理論的背景

2.1 CEFRの理念

投野編(2013)は、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment, ヨーロッパ言語共通参照枠)の理念について以下のように述べている。

CEFRは言語観、言語学学習、教授観を行動指向アプローチ(action-oriented approach)で考える。これは言語使用者を、社会行為を行う者にとらえ、言語行為はある目的で行動することによって生じると考えている(p.11)。＜省略＞言語によるコミュニケーション能力を持つということは、言語に関する知識だけにとどまらず、その知識を活用して、

実際の場面において効果的な言語機能を果たす術を得ていることである。そのためにも、この能力育成のための指導は、実際の言語使用をとおしてしか考えられない。つまり、教室の中であれば、タスク活動を通して、学習者にタスクを成し遂げるために必要な言語使用の自動化が進むような体験を多く与えることが望まれるのである (p.15)。

さらに、学習能力の説明の中で (p.16)、自律的学習者育成について以下のように述べている。

学習能力を得るとは、学習者が学ぶ対象について興味を持ち、学ぶために必要な情報と学習方略を手に入れることである。学習者に自身の多様な知識や能力を活用する機会が与えられ、実際に活動する経験を通してこそ、この能力を発達させていくことが可能となるのである。学習能力は学校を卒業した後にも新しい言語を学び続ける自律的な学習者に必要な資質であり、CEFR でその育成を重視している点である。(下線は筆者)

Holec (1981) によれば、自律した学習者とは、「自分の学習のゴールを決め、学習の内容や学習の進め方を決め、その学習に必要な教材を選択し、必要な技術を使い、学習の進捗具合をモニターしたり、学習を評価したりすることができる学習者」である。

真嶋 (2010) はさらに CEFR の魅力として「行動中心主義」を挙げ、言語学習を座学でなく、言語行動の目的のために行うものとすることであると述べ、言語の知識量ではなく、「その言語を使って何が / どんなことができるのかという」ことが言語学習の目的となると説明している。使うことではじめて達成感が得られ、意欲向上と自律が芽生えてくるのであろう。

2.2 学習到達目標としての CAN-DO リスト

文部科学省は 2013 年 3 月に、上述の CEFR の理念を参考にして、『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標設定のための手引き』を作成・公表した。この手引きで強調されているのは以下の 3 点である。

1. 外国語能力向上のために、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、教員が生徒の指導と評価の改善に活用することである (p.3)。
2. 学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という能力記述文の形で設定することにより、学習指導要領を踏まえた、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の 4 技能を有機的に結び付け、総合的に育成する指導につなげることである (p.4)。
3. 言語を用いて、「～ができるようになりたい」、「～ができるようになることを目指す」といった自覚が芽生

え、言語習得に必要な自律的学習者としての態度・姿勢が身に付くとともに、「言語を用いて～ができるようになった」という達成感による学習意欲の更なる向上にもつながることが期待される (p.4)。

このように文部科学省は、CAN-DO リスト (CDS) の形式で学習到達目標を設定させることで、外国語能力向上のための指導と評価の一体化、4 技能のバランスの取れた指導強化、自律的学習者の養成、生徒の活動を中心とした言語使用による有能感及び学習意欲の向上を目指していると考えられる。

上述のように CDS に基づく外国語教育の特徴である「行動指向アプローチ」と「自律的学習者の育成」を魅力として取り上げられている。しかし、CDS に基づいた授業実践が高校生の英語学習への有能感や意欲向上、自律的学習者の資質育成に与える影響についてまだ十分な研究が行われていない。本稿では、CDS に基づいた授業実践に対する高校生の意識を調査・検討する。

3. 本研究の背景と目的

3.1 拠点校の取り組み

V 県では、事業「英語力を強化する指導改善の取組」の支援を文部科学省から受けて、県教育委員会が 2012 年 3 月に 4 つの拠点校 (A, B, C, D 校) を指定した。拠点校では CAN-DO リストの形で学習到達目標を設定し授業改善に取り組むことになった。過去 2 年間の主な取組の特徴は以下の 5 点である。(2014 年度は拠点校として最終事業年度 (3 年目) で 4 校とも研究実践を継続している)

1. CAN-DO リストの形式で設定した学習到達目標を達成するように、授業を工夫・改善する。
2. 授業は原則英語で行うことを共通した目標に掲げている。ただ細かな文法説明などは適宜日本語を使って説明している。
3. 文法訳読式の指導のみに偏ることなく、生徒の活動が中心となるような授業を展開する。
4. 「英語を使って～できる」を実現するように授業を構成する。
5. 4 技能のバランスを取るよう工夫する。

3.2 研究目的

本研究の第一の目的は、2 年間の取組の成果と課題を明らかにすることである。また本事業は成果を他校に普及することも重要な責務の一つであるので、今後他校が CDS に基づいた授業を展開していく際の示唆を得ることも目的の一つである。

本稿は事業の目的に基づいて取り組まれてきた英語授業を 1 年 (1 学年) ないし 2 年 (2 学年) 間受けてきた高校生の意識を調査することを目的とする。調査内容は「授業への満足度」、「英語による授業理解度と慣れ」、「英

語使用有能感」,「学習への意欲向上」,「技能別達成度」,「自律的学習者の養成に対する有用性」である。本稿では自律的学習者に必要な資質を,自ら目標を設定することができる「自己目標設定力」,自らの学習状況を把握するために振り返ることができる「内省力」,学習方法が身についている「学習方略の定着」から成っていると

する。

以下に6つの研究課題を設定した。

1. 拠点校の授業改善の取組によって,生徒の授業への満足度は高まるか。
2. 英語による授業への生徒の理解度や慣れは高まるか。
3. 拠点校の授業改善の取組によって,生徒の英語使用の有能感が高まるか。
4. 拠点校の授業改善の取組によって,生徒の学習意欲は高まるか。
5. 拠点校の授業改善の取組によって,生徒の技能別学習到達目標に対する達成度は高まるか。
6. 拠点校の授業改善の取組は自律的学習者の育成に寄与するか。

4. 方 法

5件法アンケートを用いて,授業に対する高校生の意識を調査した。2013年7月と2014年3月に同じアンケートを実施した。

筆者は2012年4月から現在まで,V県の拠点校の指導内容や指導方法の改善について指導・助言を行う運営指導委員を務めてきた。よって各拠点校で開催される運営指導委員会(2回)で事業の進捗状況について説明を受けたり,CDSに基づく公開授業を観察したりする機会を得た。また拠点校の研究責任者と頻繁にメールや電話で情報交換することもできた。このようにアンケート調査結果だけでなく,これらのやり取り及び授業観察を加味して考察を行う。

4.1 調査協力者

V県の拠点校4校の1,2学年の生徒を対象とする(表1)。A校は職業科の高校である。B,C,D校は全日制普通科単独校ではほとんどすべての生徒が大学進学を希望している進学校である。

表1. アンケート協力者内訳

高校	1 学年生徒数	2 学年生徒数
A	280 (7)	310 (8)
B	201 (5)	198 (5)
C	201 (5)	202 (5)
D	280 (7)	280 (7)

()内はクラス数

4.2 調査項目

アンケートは11項目からなり,質問内容は以下の通りである。授業に対する生徒の意識について,5:とてもそう思う,とてもあてはまる,4:そう思う,あてはまる,3:どちらともいえない,ふつうである,2:あまりそう思わない,あまりあてはまらない,1:全くそう思わない,全くあてはまらない,の5件法で尋ねた。

以下は項目の文言である。「」は短縮したものである。

1. 全体として,英語授業に満足している。
「1 授業への満足度」
2. 先生の話す英語が分かるようになってきた。
「2 教師の英語理解度」
3. 授業中に英語を使うことができるようになってきた。
「3 英語使用有能感」
4. 今後,今まで以上に英語学習に取り組みたい。
「4 学習への意欲向上」
5. CAN-DO リストに基づいて,先生は授業を行っている。
「CDS による授業認識度」(今回分析には使用しない)
6. CAN-DO リストを意識し,自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた。
「6 自己目標設定力」
7. CAN-DO リストの目標の約8割以上は達成できた。
「7 技能別到達度」
7-1 リスニング「7-1 リスニング到達度」
7-2 スピーキング「7-2 スピーキング到達度」
7-3 リーディング「7-3 リーディング到達度」
7-4 ライティング「7-4 ライティング到達度」
8. CAN-DO リストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた。
「8 CDS による意欲向上」
9. CAN-DO リストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある。
「9 CDS による内省力」
10. 英語で行われる授業に慣れてきた。
「10 英語による授業への慣れ」
11. 自分なりの英語学習(勉強)方法をもっている。
「11 学習方略の定着」

Q1は「授業への満足度」,Q2,10は英語による授業理解度と慣れ,Q3は「英語使用有能感」,Q4,8は「学習への意欲向上」,Q7(7-1,7-2,7-3,7-4)は「技能別到達度」,Q6,9,11は「自律的学習者の養成」についての分析をする際に用いる。

4.3 分析方法

各校の取組の成果を平均値3.5以上あるいは肯定的な回答5,4の%の合計(期待値40%)を目安として分析する。結果・考察で使われている%はすべて回答5と4の合計である。また平均値3未満の項目にも着目する。7月と3月間の伸びは t 検定を用いて分析する。高校の

場合、校種によって成果や課題が異なることが予想されるので、高校別に考察を行い、最後にまとめとして研究課題に沿って全体考察を加える。

5. 結果・考察

5.1 A校の結果

A校は職業科高校であり、本事業の取組と受験対策とのジレンマは教師間には見られなかった。しかし中学校時代から英語嫌いな生徒が多いことから、「英語で授業を行うこと」や「英語を使って～できる」の指導方針に対して、指導への不安や自信のなさが教師の間には少なからず存在していた。

平均値が3.5以上の項目は1学年では「1授業への満足度」(7月3.69, 3月3.90), 「2教師の英語理解度」(7月3.67, 3月3.87)「4学習への意欲向上」(7月3.71, 3月3.80)「7-1リスニング到達度」(3月3.68, 7月3.61), 「7-2スピーキング到達度」(3月3.69), 「7-3リーディング到達度」(7月3.55, 3月3.67), 「7-4ライティング到達度」(3月3.53), 「10英語による授業への慣れ」(7月3.82, 3月4.06)であった(表2, 図1)。2年では, 「1授業への満足度」(7月3.57, 3月3.67), 「4学習への意欲向上」(7月3.57, 3月3.63)「10英語による授業への慣れ」(7月3.58, 3月3.67)であった(表3, 図2)。以上から, 生徒の授業への満足度と意欲向上が見られる。また, 英語で行われている授業にも慣れて授業への理解も向上している。以上の結果から授業改善への取組によって, 両学年とも「1授業全体への満足度」, 「4学習への意欲向上」, 「10英語による授業への慣れ」において良好な成果を示している。また「2教師の英語理解度」に対して回答5と4の合計が61%から73%「10英語による授業への慣れ」では67%から78%への伸びを示していることから教師の不安に反して, 生徒は教師の英語を理解できるようになってきたようである。

一方, 平均値3未満の項目は1学年で「11学習方略の定着」(7月2.70, 3月2.80), 2学年で「3英語使用有能感」(7月2.93), 「6自己目標設定力」(3月2.98), 「7-4ライティング到達度」(7月2.94, 3月2.98), 「9CDSによる内省力」(7月2.88), 「11学習方略の定着」(7月2.64, 3月2.85)であった。両学年ともに「11学習方略の定着」で低い数値を示している。もともと英語嫌いの生徒が多く家庭での予習や復習はほとんど期待できないために, 50分の授業の中で学習を定着させていかなければいけない現状がある。したがって, 自己の目標を設定させたり, 自己の学習を振りかえらせたりして自己の学習方法を身につけるなどの自律を育むにはまだ至っていないようである。

1学年において, 「3英語使用有能感」「7-2スピーキング到達度」の伸びが著しいのは生徒の活動を中心に生徒が英語を使うことを目標に取り組んできた成果であると考えられる。

5.2 B校の結果

B校は進学校ではほぼ全生徒が大学に進学する。本事業への取組と大学入試対策との間にジレンマを感じている教師もいるが研究責任者のリーダーシップによって, 英語科全体で本事業に取り組んでいる。

平均値が3.5以上を示している項目は, 1学年では「1授業への満足度」(7月3.54, 3月3.96), 「2教師の英語理解度」(3月4.00), 「4学習への意欲向上」(7月4.11, 3月4.23)「10英語による授業への慣れ」(7月3.76, 3月4.13)で(表4, 図3), 2学年では「1授業への満足度」(7月3.89, 3月3.78), 「2教師の英語理解度」(7月3.89, 3月3.98), 「4学習への意欲向上」(7月4.39, 3月4.44)「10英語による授業への慣れ」(7月3.91, 3月3.85)であった(表5, 図4)。

両学年ともに授業に満足し, 学習への意欲もかなり向上している(1年75%, 2年90%)。また英語による授業にも慣れてきている様子が窺われる(1年83%, 2年71%)。また1学年7月から3月にかけての「1授業への満足度」「2教師の英語理解度」「3英語使用有能感」「英語による授業への慣れ」の伸びは顕著である(効果量中程度)。4月入学時には英語で行われる授業に戸惑いのある生徒も多かったことが予想されるが, 1年後半には授業に慣れていき, 理解度も高まり, 英語を使うこともある程度できるようになっていった成果であると推察できる。

平均値が3未満を示している項目は両学年ともに「6自己目標設定能力」, 「8CDSによる意欲向上」「9CDSによる内省力」の項目であった。「自己目標設定能力」と「内省力」は自律的学習者に欠かせない資質であるので, 自律的学習者に必要な能力が身につけていないと考えられる。学習意欲については今後も意欲的に学習に取り組みたいという動機は高まっているが「8CDSによる意欲向上」では低い数値を示している。生徒は, 自分の意欲の向上は授業のおかげであると認識しているが“CDSのおかげ”なのかどうかは実感できないようである。あるいはCDSがそれほど役に立っていないことも考えられる。両学年ともアンケートの3を選んでいる生徒が約50%前後あることから推測できる。今後質問項目を検討する必要がある。

5.3 C校の結果

C校は超進学校である。C校で平均値が3.5以上の項目は, 1学年では「1授業への満足度」(7月3.72, 3月3.84), 「2教師の英語理解度」(7月3.63, 3月3.88), 「3英語使用有能感」(3月3.51), 「4学習への意欲向上」(7月4.23, 3月4.40), 「10英語による授業への慣れ」(7月3.91, 3月4.09)で(表6, 図5), 2学年では「1授業への満足度」(7月3.54, 3月3.72), 「2教師の英語理解度」(7月3.67, 3月3.82), 「4学習への意欲向上」(7月4.24, 3月4.49)「10英語による授業への慣れ」(7月3.85, 3月4.02)であった(表7, 図6)。

表2. A校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(1学年)

質問項目	回答率%						M	SD	t	df	p	d
	5	4	3	2	1	0						
1 全体として、英語授業に満足している	7月 13	50	30	7	0	3.69	0.80	3.65	225		.00**	0.26
	3月 24	45	27	3	0	3.90	0.82					
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月 15	46	32	7	0	3.67	0.83	3.46	225		.01*	0.25
	3月 20	53	22	5	0	3.87	0.79					
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月 6	24	46	21	3	3.09	0.89	4.12	225		.00**	0.29
	3月 7	37	42	13	1	3.35	0.84					
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月 22	35	37	7	0	3.71	0.89	1.55	225		.12	0.10
	3月 22	44	25	8	0	3.80	0.89					
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月 44	41	15	0	0	4.28	0.73	1.71	225		.09	0.13
	3月 54	31	15	0	0	4.38	0.76					
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月 8	35	46	9	2	3.37	0.84	0.26	225		.79	0.02
	3月 10	35	39	13	2	3.39	0.90					
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月 14	43	38	4	0	3.68	0.76	-1.14	225		.25	-0.1
	3月 13	42	38	6	1	3.61	0.83					
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月 6	40	44	9	0	3.43	0.76	3.89	225		.00**	0.33
	3月 17	41	35	7	0	3.69	0.84					
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月 10	44	38	8	0	3.55	0.80	1.95	225		.52	0.15
	3月 13	46	35	6	0	3.67	0.78					
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月 8	30	45	16	2	3.26	0.88	4.56	225		.00**	0.31
	3月 12	42	36	11	0	3.53	0.85					
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月 8	31	48	12	2	3.37	0.85	0.94	225		.35	0.07
	3月 8	36	45	9	3	3.31	0.84					
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月 5	33	46	13	3	3.25	0.86	3.72	225		.00**	0.26
	3月 9	42	38	9	2	3.47	0.85					
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月 21	46	27	5	0	3.82	0.84	4.26	225		.00**	0.29
	3月 33	45	19	3	1	4.06	0.84					
11 自分なりの英語学習(勉強)方法をもっている	7月 5	12	42	28	12	2.70	1.01	1.60	225		.11	0.10
	3月 8	14	42	25	12	2.80	1.06					

表3. A校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(2学年)

質問項目	回答率%						M	SD	t	df	p	d
	5	4	3	2	1	0						
1 全体として、英語授業に満足している	7月 12	40	41	7	0	3.57	0.80	1.86	245		.64	0.13
	3月 16	39	40	4	0	3.67	0.81					
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月 6	43	37	11	4	3.40	0.85	0.8	245		.42	0.05
	3月 6	41	43	9	0	3.44	0.75					
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月 3	19	50	23	4	2.93	0.85	2.38	245		.02*	0.14
	3月 3	25	49	20	3	3.06	0.84					
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月 14	40	35	9	1	3.57	0.89	0.34	245		.35	0.06
	3月 16	39	37	7	1	3.63	0.87					
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月 15	27	53	4	1	3.50	0.83	1.05	245		.29	0.07
	3月 18	28	46	7	1	3.57	0.89					
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月 3	17	64	11	4	3.04	0.76	-1.22	245		.22	-0.1
	3月 3	17	57	19	3	2.98	0.78					
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月 7	28	49	13	2	3.24	0.86	0.86	245		.39	0.06
	3月 4	34	49	12	1	3.29	0.77					
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月 7	26	49	15	4	3.16	0.90	1.47	245		.14	0.11
	3月 5	31	50	12	2	3.25	0.79					
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月 9	24	52	12	3	3.22	0.89	-0.85	245		.39	-0.1
	3月 3	27	55	13	1	3.18	0.75					
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月 2	22	50	21	5	2.94	0.83	0.68	245		.49	0.05
	3月 2	19	56	21	2	2.98	0.75					
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月 4	18	63	12	3	3.07	0.76	0.00	245		1.00	0.00
	3月 4	20	58	15	3	3.07	0.78					
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月 3	12	63	16	7	2.88	0.81	2.16	245		.03*	0.15
	3月 4	22	50	20	4	3.00	0.86					
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月 13	45	33	8	2	3.58	0.89	1.69	245		.09	0.11
	3月 15	43	35	6	0	3.67	0.82					
11 自分なりの英語学習(勉強)方法をもっている	7月 4	17	33	31	15	2.64	1.06	3.46	245		.00**	0.19
	3月 8	17	38	26	11	2.85	1.08					

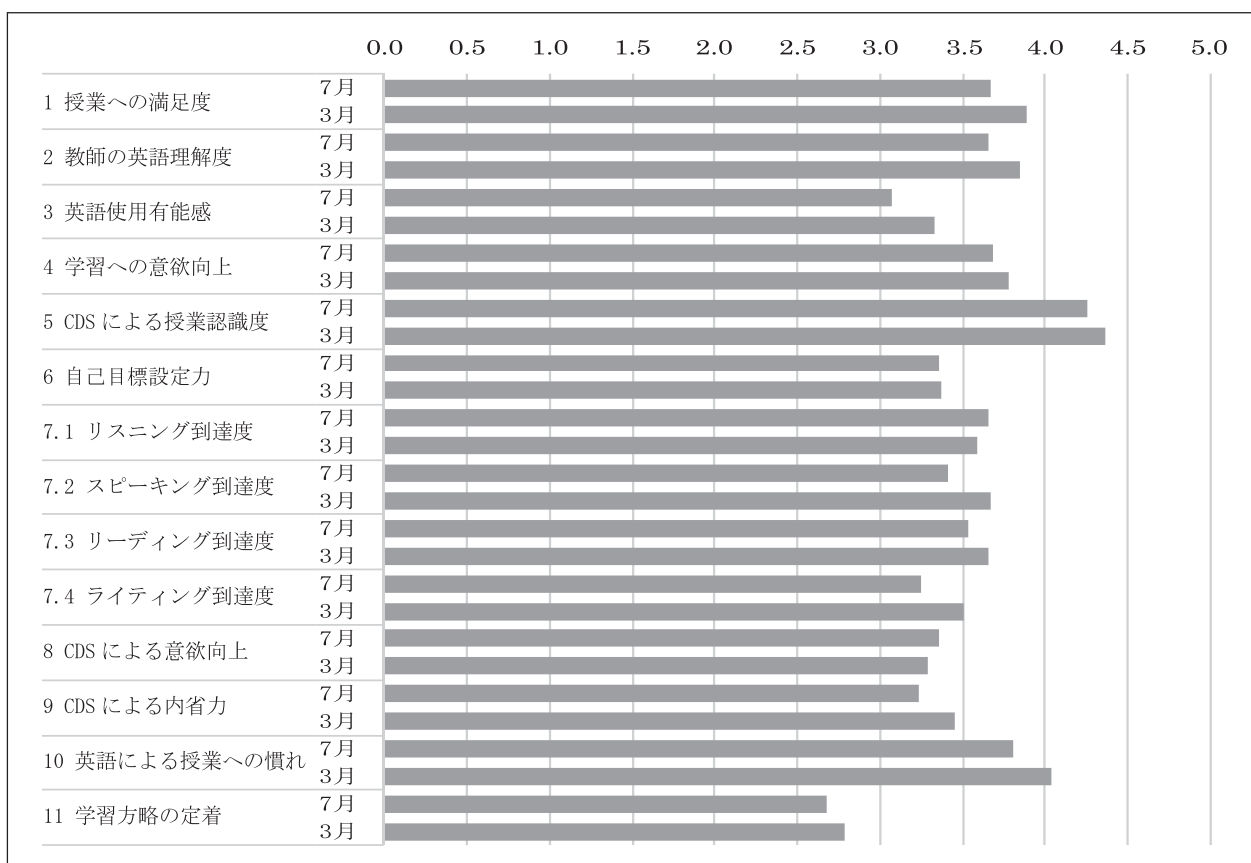


図 1. A 校 1 学年の項目別平均値

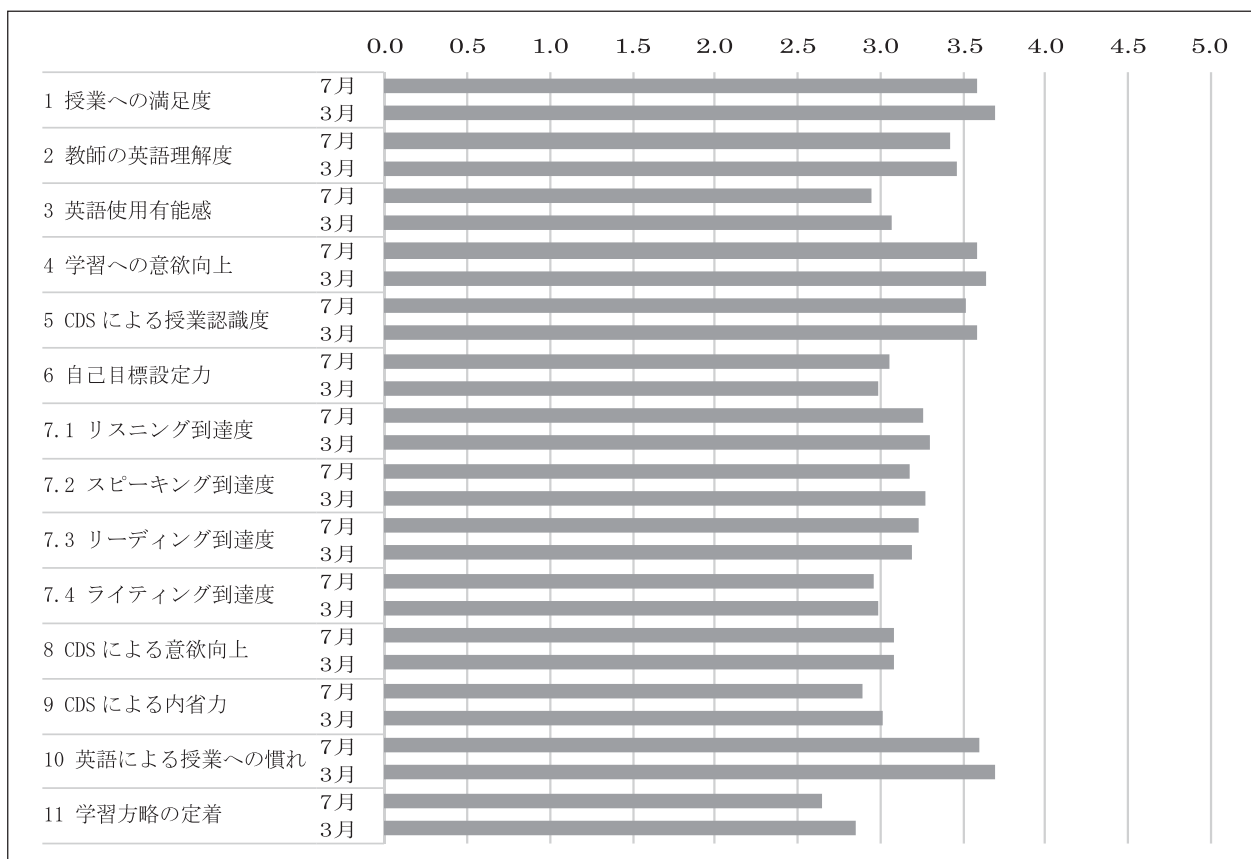


図 2. A 校 2 学年の項目別平均値

表4. B校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(1学年)

質問項目	回答率%								t	df	p	d
	5	4	3	2	1	M	SD					
1 全体として、英語授業に満足している	7月 10 42 41 5 2 3.54 0.76 3月 24 51 22 3 0 3.96 0.81	6.34	176	.00**	0.54							
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月 7 44 38 11 0 3.47 0.75 3月 25 53 20 2 1 4.00 0.78	8.76	176	.00**	0.68							
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月 1 29 47 21 1 3.07 0.85 3月 11 38 40 11 1 3.48 0.76	5.97	176	.00**	0.51							
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月 34 46 16 3 1 4.11 0.78 3月 41 44 13 2 1 4.23 0.81	1.60	176	.11	0.14							
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月 23 46 30 1 1 3.89 0.98 3月 15 41 31 10 3 3.54 0.78	-4.37	176	.00**	-0.40							
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月 0 18 49 25 8 2.76 0.96 3月 2 14 39 32 13 2.61 0.84	-2.02	176	.05*	-0.16							
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月 4 32 41 19 4 3.12 0.92 3月 3 24 42 24 6 2.93 0.90	-2.50	176	.01*	-0.21							
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月 2 27 54 15 3 3.10 0.88 3月 3 32 47 13 5 3.15 0.77	0.79	176	0.43	0.07							
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月 7 37 42 11 3 3.34 1.03 3月 15 37 32 11 5 3.47 0.88	1.64	176	.10	0.14							
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月 5 33 46 14 3 3.21 0.97 3月 8 36 38 13 5 3.29 0.86	0.91	176	.36	0.08							
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月 3 16 49 22 9 2.83 0.98 3月 3 16 45 23 13 2.73 0.93	-1.43	176	.16	-0.10							
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月 1 14 43 33 10 2.64 1.03 3月 2 21 38 24 15 2.72 0.88	1.13	176	.26	0.09							
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月 15 55 24 6 1 3.76 0.75 3月 32 51 14 3 0 4.13 0.81	5.42	176	.00**	0.47							
11 自分なりの英語学習（勉強）方法をもっている	7月 3 23 44 21 10 2.89 1.09 3月 14 25 37 18 6 3.24 0.97	4.22	176	.00**	0.33							

表5. B校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(2学年)

質問項目	回答率%						M	SD	t	df	p	d
	5	4	3	2	1							
1 全体として、英語授業に満足している	7月 19 52 27 2 0 3.89 0.72	3月 15 53 29 1 2 3.78 0.77	-1.83	175	.07	-0.14						
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月 20 52 24 4 0 3.89 0.77	3月 20 61 15 3 1 3.98 0.72	1.71	175	.09	0.12						
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月 5 22 50 20 4 3.03 0.87	3月 5 25 51 15 4 3.12 0.87	1.35	175	.18	0.10						
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月 49 41 9 1 0 4.39 0.67	3月 56 34 9 1 0 4.44 0.71	1.09	175	.28	0.08						
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月 9 43 41 6 1 3.53 0.79	3月 6 36 48 7 2 3.36 0.80	-2.66	175	.01*	-0.21						
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月 3 23 44 21 9 2.90 0.97	3月 3 7 43 38 10 2.56 0.87	-5.43	175	.00**	-0.37						
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月 6 32 41 18 3 3.19 0.90	3月 5 30 43 21 2 3.15 0.86	-.69	175	.49	-0.05						
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月 3 22 49 21 5 2.97 0.87	3月 0 18 53 26 3 2.86 0.75	-1.70	175	.09	-0.13						
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月 6 39 43 11 2 3.35 0.82	3月 5 35 45 12 2 3.30 0.83	-.87	175	.39	-0.07						
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月 3 26 48 19 5 3.03 0.86	3月 5 36 45 12 2 3.13 0.84	1.32	175	.19	0.11						
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月 3 17 50 22 7 2.87 0.90	3月 3 30 47 16 3 2.63 0.87	-3.41	175	.00**	-0.30						
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月 2 18 48 24 8 2.83 0.90	3月 1 11 47 30 11 2.74 0.95	-1.16	175	.25	-0.10						
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月 24 48 24 3 1 3.91 0.83	3月 21 50 23 5 1 3.85 0.84	-.89	175	.38	-0.07						
11 自分なりの英語学習（勉強）方法をもっている	7月 7 28 44 16 4 3.19 0.93	3月 10 28 41 16 5 3.20 1.00	.18	175	.86	0.01						

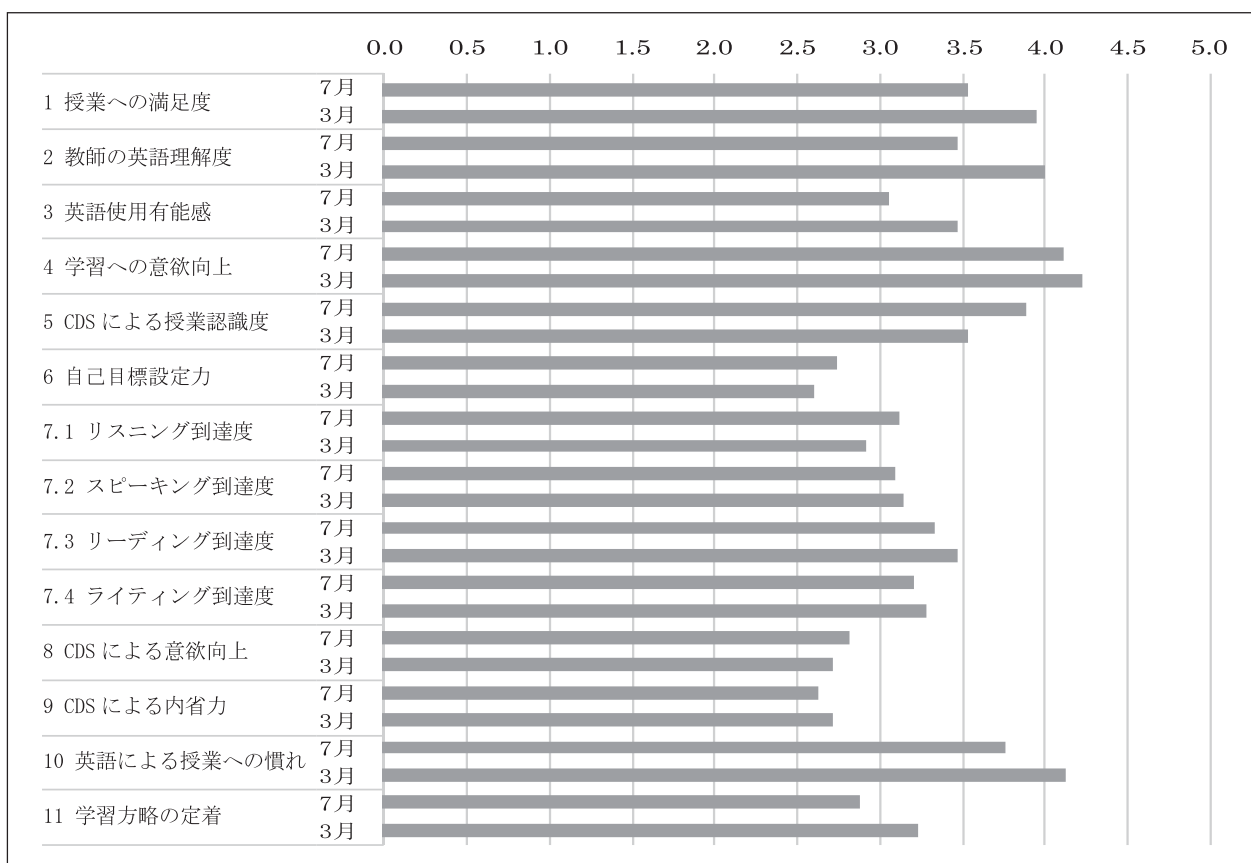


図 3. B 校 1 学年の項目別平均値

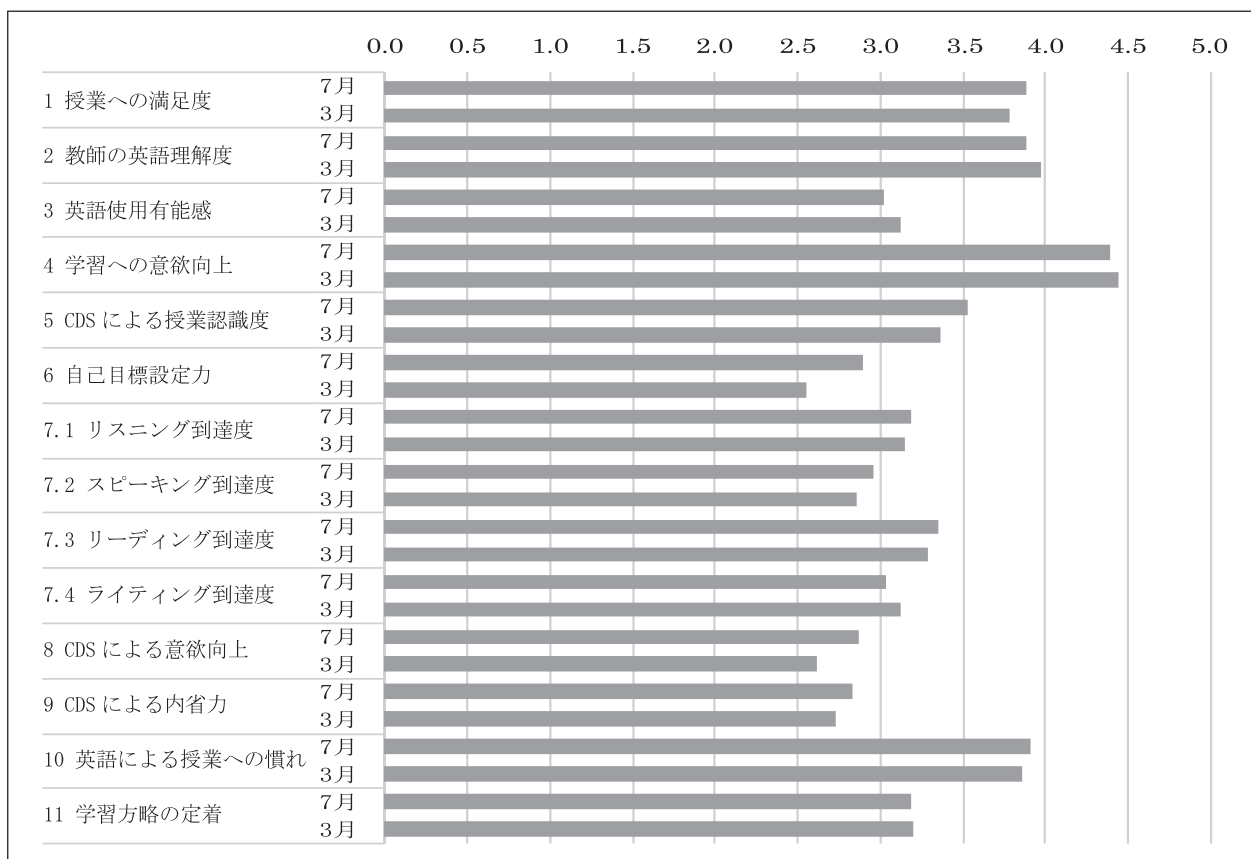


図 4. B 校 2 学年の項目別平均値

両学年ともに、取り組まれている授業に満足し、英語で行われている授業に慣れて意欲も向上している。7月から3月において顕著な伸び（効果量中程度）が見られる項目は、1学年で「2 教師の英語理解度」「3 英語使用有能感」「9 CDS による内省力」であった。「3 英語使用有能感」が伸びたのは入学当初自分の思いを表現できなかったのが後半少しずつ表現できる機会も増え自分の思いを伝えることに慣れてきたのではないかとと思われる。

2 学年「3 英語使用有能感」の伸びの差は効果量中程度を示している。これは「ライティング到達度」においても有意な差が認められているので、書く活動に重点を置いた指導の成果であると考えられる。

平均値が3未満の項目は、1学年で「6 自己目標設定能力」（7月 2.69, 3月 2.95）, 「8 CDS による意欲向上」（7月 2.76, 3月 2.98）, 2学年で「6 自己目標設定能力」（7月 2.85, 3月 2.95）, 「7-2 スピーキング到達度」（7月 2.99）, 「8 CDS による意欲向上」（7月 2.74, 3月 2.90）, 「9 CDS による内省力」（7月 2.73, 3月 2.98）であった。「6 自己目標設定能力」「9 CDS による内省力」の低さは自律的学習者の資質が十分身につけていないことを示している。

5.4 D校の結果

D校で平均3.5以上の数値を示した項目は、1学年で「1 授業への満足度」（7月 3.81, 3月 4.03）, 「2 教師の英語理解度」（7月 3.60 3月 3.89）, 「4 学習への意欲向上」（7月 4.43, 3月 4.39）, 「7-3 リーディング到達度」（3月 3.54）, 「10 英語による授業への慣れ」（7月 3.87, 3月 4.02）で（表8, 図7）, 2学年では「1 授業への満足度」（7月 3.87, 3月 3.95）, 「2 教師の英語理解度」（7月 3.87, 3月 3.88）, 「4 学習への意欲」（7月 4.36, 3月 4.40）, 「7-1 リスニング到達度」（3月 3.55）, 「7-3 リーディング到達度」（3月 3.54）「10 英語による授業への慣れ」（7月 4.04, 3月 4.04）である（表9, 図8）。以上から使うことを中心に、英語で行われる授業に概ね慣れて満足し意欲も向上していると推察できる。

7月から3月にかけて顕著な伸びを示した項目は1年で「2 教師の英語理解度」, 「1 授業への満足度」, 「3 英語使用有能感」, 「11 学習方略の定着」である。2年では特に「7-1 リスニング到達度」, 「7-2 スピーキング到達度」の伸びは大きく、次いで「11 学習方略の定着」である。進学校では軽視される傾向にあるリスニング、スピーキングの到達度の伸びが著しい（効果量中程度）のはCDSの形式で技能別に目標を設定し、バランスの取れた4技能の指導が工夫・実践されてきた成果であると考えられる。

平均値が3未満の項目は両学年ともに「自己目標設定能力」, 「8 CDS による意欲向上」, 「9 CDS による内省力」であり、D校においても自律的学習者の資質が身につくまでは至っていない結果となった。

6. まとめと取組への示唆

研究課題に沿って調査結果をまとめていく。研究課題1「授業への満足度」に関して、4校すべてにおいて満足度にかなり高い数値を示した。生徒の活動中心、英語による授業、4技能のバランスを考慮した指導、「英語で〜できる」機会が多い授業に満足しているようである。

研究課題2「英語による授業への理解度や慣れ」について、4校ともに高い数値を示しており、教員全員でできるだけ英語を使い生徒が理解できる授業づくりに取り組んだ成果であろう。ただ、教師が英語で授業をすることも大切であるが、何よりも大切なことは生徒が英語を使って何かができるようになることである。よって、使う機会が十分に保障され、使うことによって自信がつかうような環境や場面設定が一層望まれる。

研究課題3「英語使用有能感」に関して、平均値が高いとは言えない（3～3.5）がB校2学年以外は、4校どの学年においても7月3月間の差に有意差が認められていた。よって生徒に英語を使って〜する機会が多く与えられ、後半には英語を使う自信がついてきたと考えられる。

研究課題4「英語学習への意欲向上」に関して、「2 学習への意欲向上」に対して4校すべてにおいて高い数値を示したが、一方「8 CDS による意欲向上」については低い数値を示す結果となった。これまでの取組や指導法（生徒の活動中心、英語による授業、4技能のバランスを考慮した指導、行動を中心とした活動など）によって生徒の意欲は向上したと考えられるが、CAN-DO リストによる学習到達目標によって自分の意欲が向上したかどうかを生徒が判断できなかったからであろう。あるいはCDSのような長期の目標が生徒の意欲に直接影響を与えていない可能性もある。また、CDSの目標を生徒に意識させる教師側の継続的な努力と工夫が足りなかったのかもしれない。この点に関しては今後一層の研究が必要である。

研究課題5「技能別到達度」概ね良好であるが技能別目標が全体的にやや高めに設定されている傾向があるために、平均値が4を超える拠点校はなかった。平均値3未満の項目も見られたので、設定された学習到達目標が生徒の実態に合っていたのか今後検討を要する。また低い数値を示した項目についてその目標を達成するためのタスク等が授業でほとんど行われなかった場合もあるので今後慎重に検討する必要がある。

研究課題6「自律的学習者の育成への有用性」について、4校とも低い数値を示す結果となった。現在どの拠点校も試行錯誤を繰り返しながら授業を実践しており、一斉授業においては一つのグレードの目標を意識させてその目標を達成のために授業を組み立てている。生徒が自分の目標を設定し、自分の学習状況を振り返り、自分のレベルを認識して更なる目標に向かって学習に取り組

表6. C校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(1学年)

質問項目	回答率%								<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
	5	4	3	2	1	<i>M</i>	<i>SD</i>					
1 全体として、英語授業に満足している	7月	21	39	31	8	1	3.72	0.91	1.76	187	.08	0.13
	3月	22	43	32	3	0	3.84	0.81				
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月	13	48	29	8	2	3.63	0.87	3.94	187	.00**	0.31
	3月	17	60	19	4	1	3.88	0.77				
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月	6	28	48	14	3	3.19	0.87	5.27	187	.00**	0.38
	3月	9	46	36	9	2	3.51	0.83				
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月	43	41	13	2	1	4.23	0.80	2.48	187	.01*	0.21
	3月	53	35	11	1	1	4.40	0.74				
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月	20	33	39	4	3	3.63	0.96	2.29	187	.02*	0.20
	3月	21	43	31	4	1	3.81	0.83				
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月	4	10	49	25	12	2.69	0.94	3.53	187	.00**	0.29
	3月	4	18	52	21	5	2.95	0.87				
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月	11	31	43	14	2	3.36	0.90	-4.23	187	.00**	-0.30
	3月	6	26	38	26	4	3.03	0.96				
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月	5	27	53	13	2	3.19	0.80	1.33	187	.19	0.10
	3月	4	38	43	13	3	3.27	0.83				
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月	5	38	42	14	1	3.32	0.82	2.39	187	.02*	0.18
	3月	13	39	35	11	3	3.48	0.94				
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月	7	30	44	16	2	3.24	0.89	3.62	187	.00**	0.31
	3月	11	41	38	6	3	3.52	0.89				
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月	4	11	54	20	11	2.76	0.93	2.86	187	.00**	0.24
	3月	4	20	52	20	5	2.98	0.86				
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月	5	13	49	23	10	2.80	0.95	4.64	187	.00**	0.38
	3月	6	29	43	16	5	3.15	0.95				
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月	26	46	23	5	1	3.91	0.85	3.21	187	.00**	0.22
	3月	33	47	18	2	1	4.09	0.81				
11 自分なりの英語学習（勉強）方法をもっている	7月	10	19	46	20	6	3.07	1.00	1.87	187	.06	0.12
	3月	12	22	46	15	5	3.19	1.01				

表7. C校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(2学年)

質問項目	回答率%							<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>	<i>d</i>	
	5	4	3	2	1	<i>M</i>	<i>SD</i>					
1 全体として、英語授業に満足している	7月	9	43	40	7	0	3.54	0.76	3.21	165	.00**	0.24
	3月	13	52	28	7	0	3.72	0.78				
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月	10	52	32	5	1	3.67	0.75	2.55	165	.01*	0.21
	3月	14	55	28	2	0	3.82	0.70				
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月	3	23	58	14	1	3.14	0.71	4.18	165	.00**	0.37
	3月	5	37	49	8	0	3.40	0.71				
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月	42	42	15	1	0	4.24	0.75	4.15	165	.00**	0.35
	3月	57	36	8	0	0	4.49	0.64				
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月	7	25	57	10	2	3.26	0.80	1.43	165	.15	0.12
	3月	7	33	53	5	2	3.36	0.79				
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月	3	16	51	23	7	2.85	0.87	1.41	165	.17	0.11
	3月	3	23	49	16	9	2.95	0.94				
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月	2	32	48	15	2	3.17	0.80	-4.5	165	.66	-0.04
	3月	2	31	48	15	4	3.14	0.83				
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月	1	21	55	20	2	2.99	0.73	1.68	165	.09	0.14
	3月	1	23	62	12	2	3.10	0.68				
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月	2	34	50	13	1	3.23	0.75	3.52	165	.00**	0.29
	3月	7	40	46	6	1	3.45	0.76				
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月	4	29	50	17	1	3.18	0.77	2.64	165	.00**	0.22
	3月	7	37	44	10	2	3.36	0.84				
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月	2	13	51	25	9	2.74	0.87	2.39	165	.02*	0.18
	3月	4	16	55	17	6	2.90	0.88				
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月	1	13	51	27	8	2.73	0.83	3.66	165	.00**	0.29
	3月	3	22	52	17	6	2.98	0.87				
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月	21	50	22	6	1	3.85	0.84	2.75	165	.01*	0.21
	3月	27	51	21	2	0	4.02	0.74				
11 自分なりの英語学習（勉強）方法をもっている	7月	7	27	37	22	6	3.07	1.01	3.07	165	.00**	0.22
	3月	9	32	41	14	4	3.28	0.95				

CAN-DO リストに基づいた英語授業実践に関する高校生の意識調査

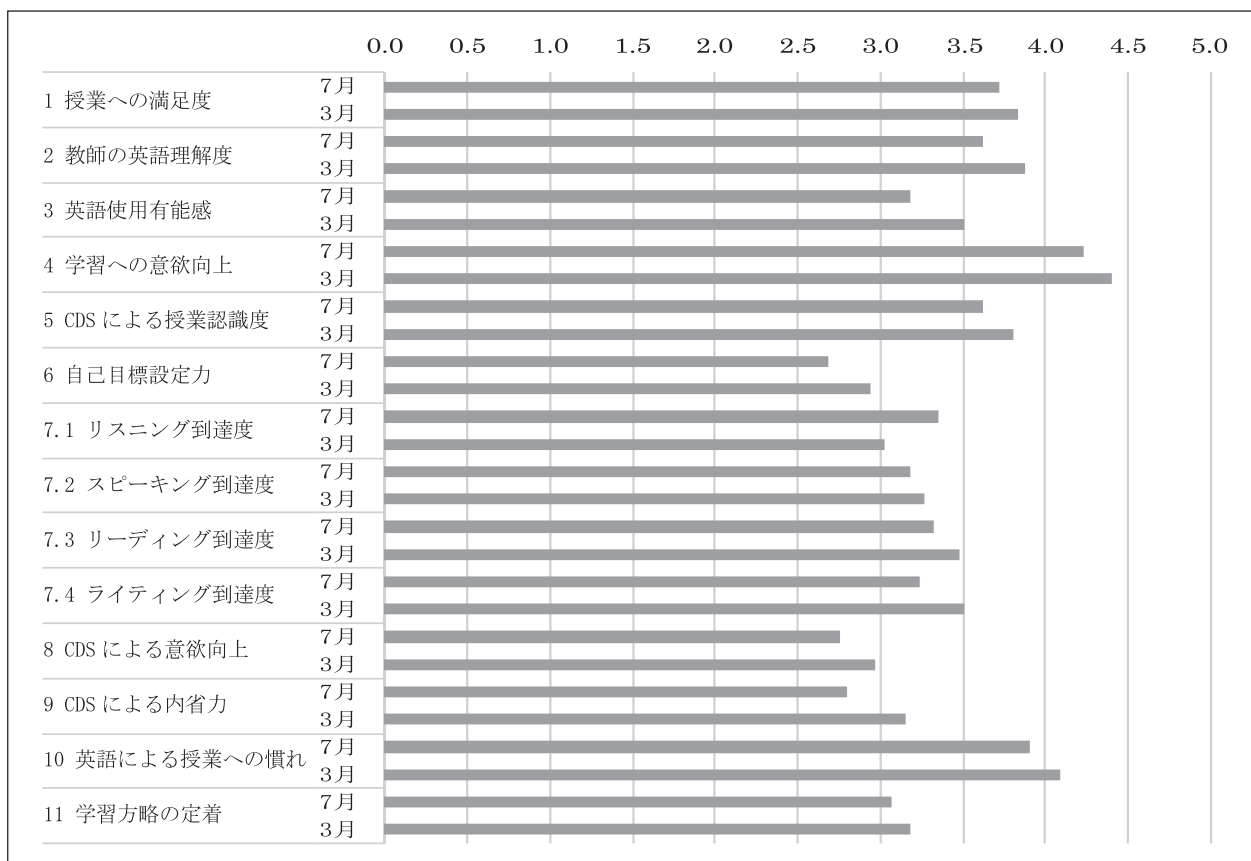


図 5. C 校 1 学年の項目別平均値

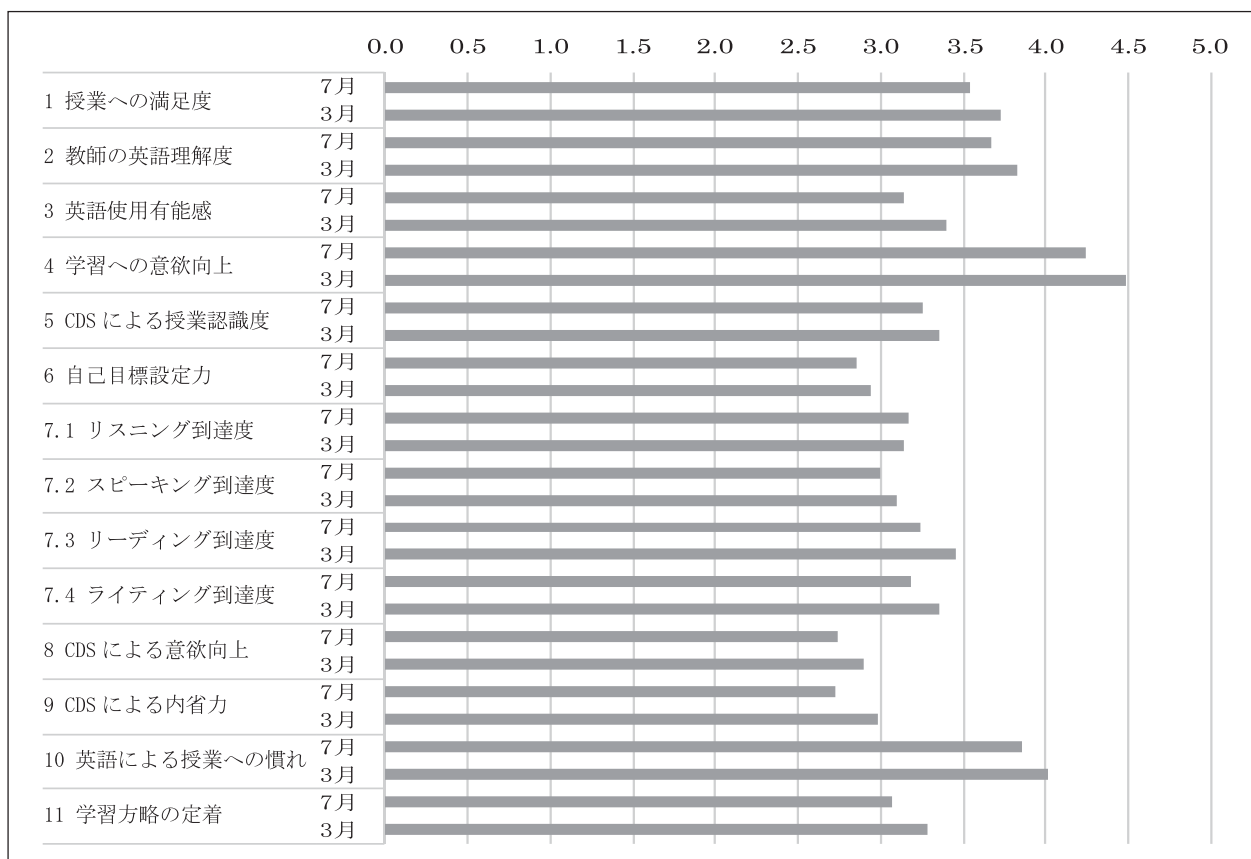


図 6. C 校 2 学年の項目別平均値

表8. D校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(1学年)

質問項目	回答率%						M	SD	t	df	p	d
	5	4	3	2	1	0						
1 全体として、英語授業に満足している	7月 20	46	31	4	0	3.81	0.81	4.08	247		.00**	0.30
	3月 24	57	16	3	0	4.03	0.72					
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月 9	50	34	6	1	3.60	0.77	5.89	247		.00**	0.38
	3月 18	55	24	3	0	3.89	0.72					
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月 4	22	56	15	3	3.08	0.80	3.72	247		.00**	0.26
	3月 6	33	47	13	1	3.29	0.79					
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月 54	37	9	1	0	4.43	0.69	-.81	247		.42	-0.06
	3月 52	37	9	2	0	4.39	0.74					
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月 19	45	32	3	1	3.78	0.83	-.64	247		.52	-0.04
	3月 16	46	33	5	0	3.74	0.79					
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月 4	19	45	23	9	2.84	0.95	-1.8	247		.08	-0.12
	3月 1	19	42	29	10	2.73	0.91					
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月 6	30	49	13	2	3.26	0.83	-.51	247		.61	-0.04
	3月 6	30	45	17	2	3.22	0.86					
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月 4	31	47	15	2	3.21	0.81	-1.2	247		.23	-0.08
	3月 3	30	47	18	2	3.15	0.81					
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月 9	41	35	14	2	3.41	0.90	2.24	247		.03*	0.15
	3月 10	46	33	10	1	3.54	0.84					
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月 3	33	44	18	1	3.19	0.81	1.44	247		.15	0.10
	3月 5	36	43	14	2	3.27	0.85					
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月 4	20	47	22	6	2.93	0.91	-2.5	247		.01*	-0.17
	3月 1	18	47	23	10	2.77	0.91					
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月 4	19	47	22	8	2.90	0.94	1.82	247		.07	0.13
	3月 2	29	43	18	7	3.02	0.93					
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月 19	55	19	5	1	3.87	0.81	2.88	247		.00**	0.20
	3月 28	51	18	3	0	4.02	0.79					
11 自分なりの英語学習(勉強)方法をもっている	7月 8	26	42	18	6	3.11	1.00	3.11	247		.00**	0.20
	3月 11	31	39	17	2	3.31	0.97					

表9. D校における項目別の平均値とSD及びt検定の結果(2学年)

質問項目	回答率%						M	SD	t	df	p	d
	5	4	3	2	1	0						
1 全体として、英語授業に満足している	7月 16	58	21	4	0	3.87	0.73	1.80	255		.07	0.12
	3月 20	57	21	2	0	3.95	0.70					
2 先生の話す英語が分かるようになってきた	7月 18	56	24	5	0	3.87	0.76	.17	255		.86	0.01
	3月 16	59	22	3	0	3.88	0.72					
3 授業中に英語を使うことができるようになってきた	7月 4	33	48	14	1	3.24	0.79	.50	255		.62	0.03
	3月 5	33	45	16	1	3.27	0.82					
4 今後、今まで以上に英語学習に取り組みたい	7月 48	40	12	0	0	4.36	0.68	.81	255		.42	0.05
	3月 51	39	8	2	0	4.40	0.70					
5 CAN-DOリストに基づいて、英語の授業が行われている	7月 16	42	38	4	0	3.70	0.80	-.08	255		.42	-0.05
	3月 16	41	36	6	0	3.66	0.83					
6 自分の目標を設定して英語学習に取り組んできた	7月 2	19	48	25	6	2.82	0.88	1.87	255		.06	0.12
	3月 5	21	43	25	7	2.93	0.96					
7.1 リスニングの目標の約8割以上は達成できた。	7月 5	37	43	13	3	3.26	0.88	5.40	255		.00**	0.35
	3月 11	45	36	9	1	3.55	0.82					
7.2 スピーキングの目標の約8割以上は達成できた	7月 3	19	53	22	3	2.94	0.83	6.00	255		.00**	0.38
	3月 5	31	48	15	1	3.25	0.80					
7.3 リーディングの目標の約8割以上は達成できた	7月 7	44	36	13	1	3.40	0.86	2.36	255		.02*	0.16
	3月 10	46	33	11	1	3.54	0.84					
7.4 ライティングの目標の約8割以上は達成できた	7月 4	31	43	20	2	3.11	0.88	2.07	255		.04*	0.14
	3月 4	34	44	16	2	3.23	0.83					
8 CAN-DOリストのおかげで英語学習への意欲が高まってきた	7月 2	15	54	24	6	2.80	0.84	1.21	255		.23	0.07
	3月 2	20	48	22	8	2.86	0.89					
9 CAN-DOリストを見返して自分の英語力が伸びたと思うことがある	7月 3	26	45	21	6	2.96	0.92	.49	255		.62	0.03
	3月 3	29	39	22	7	2.99	0.96					
10 英語で行われる授業に慣れてきた	7月 26	55	15	4	0	4.04	0.75	.17	255		.86	0.01
	3月 25	57	16	2	0	4.04	0.70					
11 自分なりの英語学習(勉強)方法をもっている	7月 9	31	37	20	3	3.22	0.97	3.30	255		.00**	0.20
	3月 11	37	37	13	2	3.41	0.92					

CAN-DO リストに基づいた英語授業実践に関する高校生の意識調査

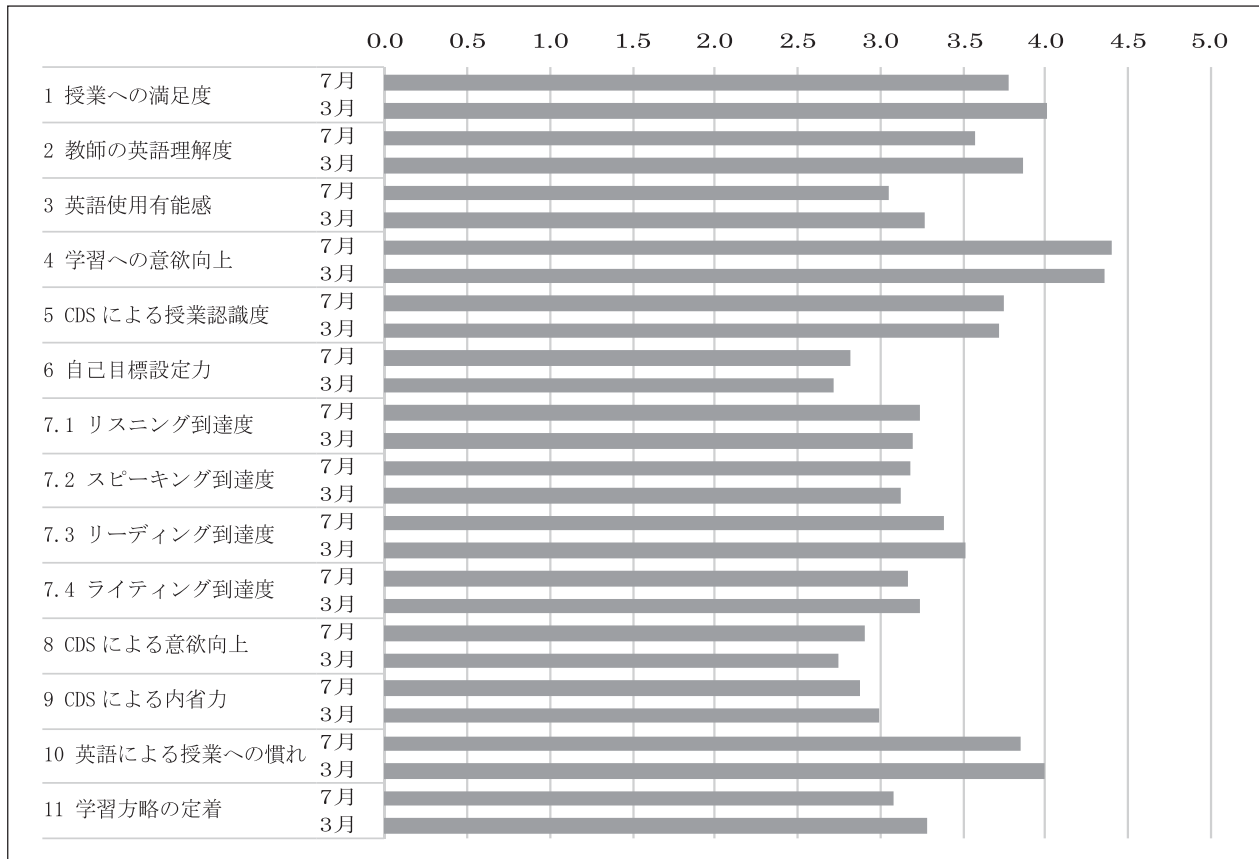


図 7. D 校 1 学年の項目別平均値

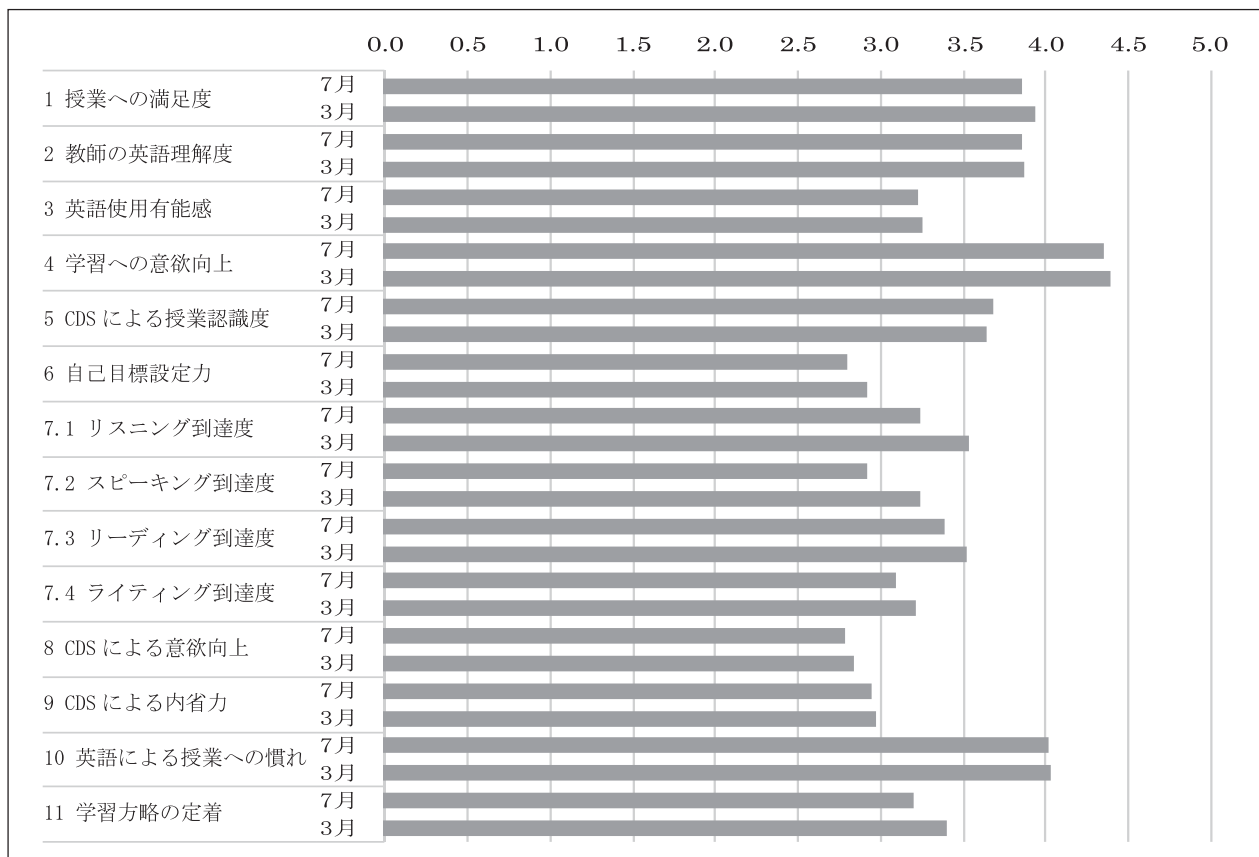


図 8. D 校 2 学年の項目別平均値

むようにはなっていないようである。本事業の取組は教師の授業改善にはかなり役立っているようだが、自律的学習者養成にはさらなる改善が必要となる。

岡崎（2014）でも指摘したように、教師が授業の最初に目標を明確に示したり、授業の最後に振り返りカードや Learning Journal（学習日誌）などを用いたりして、「本日の目標」についてどの程度達成できたのか、どこができなかったのか、次に何ができるようになりたいのか、などを振り返られることが「内省力」の養成に役立つであろう。

また教師が常に目標を示すだけでなく、生徒が自分の学習の現状を鑑み、CDSに基づいて目標を決めて授業に臨む機会を持つことが自己目標設定力の養成につながるであろう。ただ、CDSは長期の目標のため、日々の授業の目標設定にうまく合致しないこともある。CDSをその日の授業の目標に合致させ、日々の授業に落とし込む工夫と実践が今後ますます必要となる。

ここ2年で各拠点校の授業や教師の指導法に対する考え（ビリーフ）も少しずつ変化してきた（Okazaki, 2014）が、まだ「英語を用いて～できる」という考えやそれを実現する指導法が普及するには喫緊の改革が必要である。全国の高校にCDSを設定させ、それに基づいた授業を普及徹底させるのには、以下の改革が早急に必要となるであろう。

- 1 <教科書改革> 4技能をバランスよく養成できる教科書を作成する。4技能別あるいは2技能以上の統合で「英語を用いて～できる」というタスクがバランスよく盛り込まれている教科書が必要である。スピーキング、ライティングだけでなく、リスニング、リーディング力も十分に養成できるタスクが盛り込まれていることが重要である。
- 2 <大学入試改革> 大学入試において「英語を用いて～できる」問題を出題する。知識のみを問う問題をできるだけ出題しない。
- 3 <教員研修改革> 「英語を用いて～できる」を実現する授業を組み立てるための研修を実施する。

拠点校の教師の授業改善や実践が実を結ぶために、一日も早い改革が望まれる。

謝辞

本調査はV県の教育委員会及び拠点校の全面的な協力を得て行いました。関係の先生方には心から感謝申し上げます。

注

1. 文部科学省は、平成22年11月に「外国語能力の向上

に関する検討会」（座長：吉田研作上智大学外国語学部英語学科教授）を設置し、生徒の外国語能力の向上のため、目標設定の在り方をはじめ、指導方法、教材の在り方などの方策について、検討を進めてきた。検討会は「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」をとりまとめた。

2. 本稿においては、学習到達目標を4技能別にリストにしたものという意味で「CAN-DO リスト」及び「CDS」（can do statements）両方を用いる。

引用文献

- Holec, H. (1981). *Autonomy and foreign language learning*. Oxford: Pergamon Press.
- 真嶋潤子 (2010). 『2.3 日本の言語教育における「ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」と「能力記述」 (can do statements)』の影響－応用可能性に関する一考察』M.G. シュミット, 長沼君主, F. オドワイヤー, A. イミック, 境一三編『日本と諸外国の言語教育におけるCan-Do 評価：ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の適用』, 朝日出版社
- 文部科学省 (2011) 外国語能力の向上に関する検討会：国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf
- 文部科学省 (2013) 『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf
- Okazaki, H. (2014). Hub-High School English Teachers' Reflections on CDS-Based Teaching Practices. 全国英語教育学会紀要 ARELE, 25 巻 (頁 255 ～ 270)
- 岡崎浩幸. (2014) 「CAN-DO リストに基づいた英語授業に関する高校生の意識調査：拠点校1年目の授業実践」富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 8号, Page 117-125
- 投野由紀夫編 (2013) 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』大修館書店

(2014年9月1日受付)

(2014年10月8日受理)